

多様化する日本語教育に対応する指導力の評価について —指導力評価のためのポートフォリオをめぐって—

Teacher Self Assessment vis-a-vis New Trends in the Japanese Language Education: a Proposal for Teacher Portfolio

西原鈴子 NISHIHARA, Suzuko

国際交流基金日本語国際センター The Japan Foundation, Japanese Language Institute

【キーワード】 教育評価 教師自己評価 ポートフォリオ評価

本稿は、学習者、学習環境、学習支援者などの状況が急速に多様化する日本語教育の世界において、学習者支援を担当する関係者が持つべき資質と能力はどのようなものであるべきか、それらをどのようにして見極めることができるのかという疑問に答える方法を考察することを目的とする。まず初めに、教育評価に関する学校教育界の新しい動向を概観し、次に、日本語教育における指導力評価に関して文化庁および国際交流基金からの提案を検討する。最後に、それらのガイドラインを教育実践に生かすために必要な資質と能力を、ポートフォリオによって具体化し、記述することを提案する。

1. 学校教育における教育評価の動向

田中 (2012) は、真に教育的な評価とは何かという問いを出発点として、「子どもたちに質的に高い学力を保障し、教育実践への参加を促す装置としての教育評価」であることを評価における最重要目標であると提案している。そのような評価方法の原理として提案されているのは、以下の5つのポイントである。

- (1) 教育目標に準拠した評価
- (2) カリキュラムに適合した評価
- (3) 自己評価
- (4) パフォーマンス評価
- (5) ポートフォリオ評価

「教育目標に準拠した評価」は、従来の「相対評

価」が示してきた「客観性」重視の潮流が、学力実態を伴わない排他的な競争を激化する非教育的な評価観であるという反省から生まれた転換の方向を示すものであるとしている。そしてこれは、主観性を伴ういわゆる絶対評価なのではなく、教育目標を到達点とする客観的な規準 (Criterion) および基準 (Standard) に準拠した評価であると定義する。同時に、目標に準拠しているかどうかは、子どもたちも教師たちと同様に参加する教育活動によって決められるべきであると提案している。

「カリキュラムに適合した評価」は、基本的な評価方法の原理である「妥当性」と「信頼性」が、対立する概念として捉えられるのではなく、評価の客観性を担保する二つの契機として把握されることを提案し、その過程における最重要な概念として、評価対象に想定されている構成概念を適切に測るための「カリキュラム適合性」を提起している。

ここで提案されている評価においては、授業やカリキュラムを通じて子どもたちにどのような学力や能力の形成を行うのかを規定する。子どもたちは、観察の自由記述や対話によって、教師や保護者・地域住民などの教育のステイクホルダーと一緒に、目標となるパフォーマンスを達成するための方法について検討することが奨励される。そのプロセスにおいて、子どもたちは「自己評価」の力量を形成して行くことができるとされている。「自己評価」は「メタ認知」や「モニタリング」に相当し、自分の人となりや学習の状態を評価することによって自分を確

認し、今後の行動を調節する行為であるという。

パフォーマンス評価で語られるパフォーマンスとは、自分の考え方や感じ方といった内面の精神状態を、身振りや動作や絵画や言語などの媒体を通じて外面に表出すること、あるいはそのように表出されたものをいう。そのようなパフォーマンスを生み出すために、学習の様相を把握し、学力の様相としての思考力、判断力、表現力を捉えるのがパフォーマンス評価であるという。

そのような教育活動の過程で、子どもたちが創造した作品や様々な評価記録を収集したものがポートフォリオである。学習結果としての完成品だけではなく、日常の学習過程で生み出されてくる様々な作品や評価記録が蓄積されている。学習場面で生じる疑問や葛藤のプロセスを映し出している数々のメモや小テスト、教師への質問カード、ワークシートなどは、子どもたちの学習の足跡を具体的に示すものとなる。

田中が特に強調するのは、教育評価が一般的な通念として、教師による一方的な行為であるかのごとく考えられていることに反論し、子どもを中心にして教育行政、地域社会、父母も含めて、共同の作業として取り組んでいくものであるということである。特にポートフォリオ評価では、子どもによる自己評価能力を重視している。

2. 学校教育における教師評価

田中(2012)はまた、評価の根幹となる「カリキュラム適合性」を担保する役割を担うステイクホルダーとしての教師に対する評価は非常に重要であると考えている。カリキュラムに合った教育実践計画を立案実行する一翼を担うからであり、教育専門家としてより良い仕事をするために成長し続けるべき存在だからであるという。

教師の指導力に関しては、点検項目を総括する側面として、木原(2004)は、以下の3つを挙げている。

- (1) 授業づくりの側面
- (2) 学校システムの整備
- (3) 研究・研修の側面

授業づくりの側面は、学校における教育活動のプロセスに関するものであり。学校システムの整備はカリキュラム構築の全体像構築に関する側面である。最後の研究・研修の側面は教師の成長を促進する諸活動の側面である。本稿では特に(1)の側面について考察する。

梶田(2010)は、教育においては教師の諸能力が全面的に問われるとし、教師評価の基本的視点として以下の5つの能力を挙げている。

- (1) 人間的社会的に成熟し、しっかりしている。
- (2) 子どもとの間に教育的な関係が創れる。
- (3) 担当する教科等の指導がうまくできる。
- (4) 集団を全体としてうまく指導できると同時に、1人ひとりをもっと生かせる。
- (5) 父母を始め地域の人々に尊敬される。

そして、「良い指導」に関して教師が自己評価に使うべきポイントを次のように提案している。

- (1) 教師自身の知識・能力・経験
- (2) 指導内容についての知識。計画・自信
- (3) 子どもの発達に関する知識、個別性の理解
- (4) 子どもへの態度・関心・動機付け
- (5) 教育コミュニティへの参加・協議
- (6) 教師としての成長の目標
- (7) 人間的成長の目標

以上のような学校教育における評価の動向は、日本語教育界にも共有されている。「子どもたち」を「日本語学習者」に置き換えれば、日本語教育界の掲げる評価に関する理念も学校教育と基本的に共通であるといえる。特に近年発表された二つの日本語教育の指針に鮮明に反映されている。以下ではそのことを概観する。

3. 文化庁および国際交流基金の指針

最近開発・発表された国際交流基金（JF日本語教育スタンダード）および文化庁（「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案）の日本語教育に関する指針は、CEFR（外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠）の理念を視野に入れて開発された。CEFRの共通参照枠は、2001年に発表されて以来、ヨーロッパのみならず世界で広く注目され、各言語教育で実際に利用されている。その背景には、価値観が多様化し、人と人との接触や交流が拡大する社会においてことばによるコミュニケーションの重要性が再認識されていることがある。この参照枠を共有することにより、学習者、社会、教育機関は言語能力について共通の指標を持つことができる。全ての指標は理論的に妥当であることが証明されており、熟達度のレベルが能力記述によって定義付けられ、透明性が担保されているからである。

CEFRの考え方によれば、言語学習の達成目標は「ことばに関して何を知っているか」よりも「ことばを使って何ができるか」という課題を達成する

ことにある。したがって、学習の段階ごとに、何ができるか、すなわちそれぞれの能力記述（Can-do statement）を示すことによってカリキュラムが展開する。達成目標が現実の生活の中で「～ができる」ことなのであれば、それらの行為は自己観察及び自己評価が可能であり、学習の過程における成果は「ポートフォリオ」形式で記録されることによって、それを参照した自己評価が基礎的な達成度評価となり得ることになる。

国際交流基金は、2010年に「JF日本語教育スタンダード」を刊行し、それをを用いることにより、日本語の熟達度をCEFRに準じて知ることができ、人々の移動に伴う転校・転職などの際に情報を共有することができるかと提言している。JF日本語スタンダードは、コース・デザイン全般にわたってCan-doリストが使われるべきであるとし、それによって学習目的を明確にし、学習成果を考えるツールとなるとしている。評価のツールとしては、学んだことを記録し保存するためにポートフォリオを活用している。指導力評価に関しては、これまで踏み込んで取り上げられた記述はない。

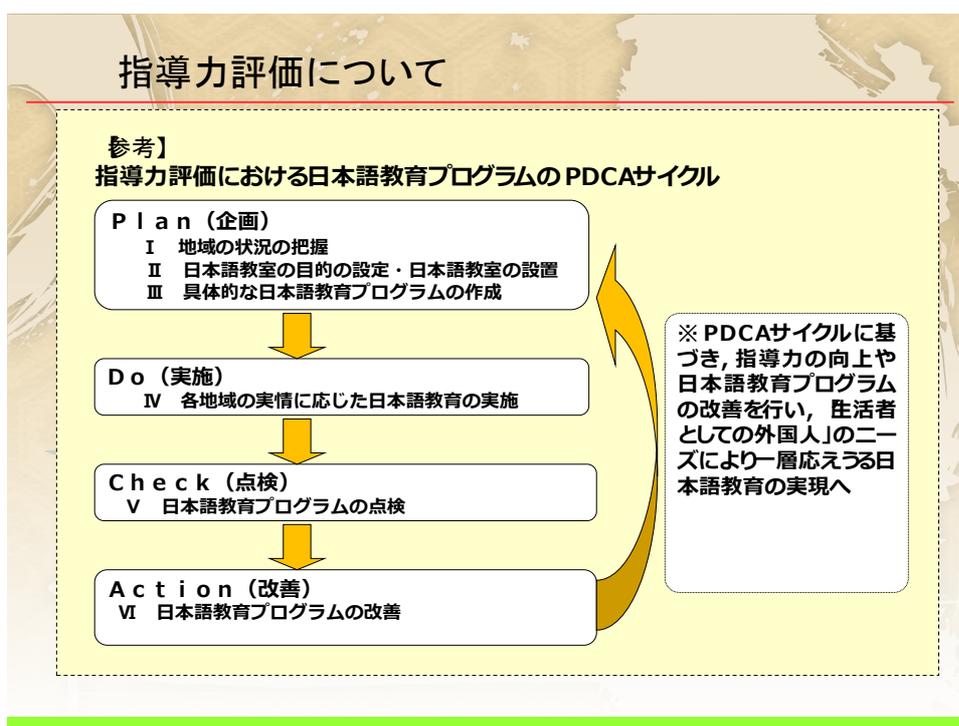


図1 指導力評価のPDCAサイクル

文化庁の報告書では、2010年から刊行された「生活者としての外国人」の日本語教育の標準的なカリキュラム案」に始まり、2013年2月に刊行した「生活者としての外国人」に対する日本語教育における指導力評価」に至るまで5つの報告書を刊行している。その最終報告書では、「生活者としての外国人」に対する日本語教育の目的・目標を踏まえ、指導力評価の目的を以下のように総括している。

「生活者としての外国人」に対する日本語教育を行う上で必要な能力一般ではなく、「生活者としての外国人」に対するカリキュラム案等を活用して行う上で必要な能力について評価することにより、その向上を図り、「生活者としての外国人」のニーズにより一層応えうる日本語教育の実現につなげること

この記述は、学校教育における評価方法の原理として田中（2012）が挙げた「カリキュラムに適合した評価」と相通じる理念を含んでいる。この報告書ではこの目的の記述を論点(1)とし、さらに以下の論点を明らかにしている。

論点2：評価の対象 地域の状況に応じた日本語教育プログラムの企画（Plan）、実施（Do）、点検（Check）、改善（Action）をPDCAサイクルに基づいて行う能力を対象とする。（図1参照）

論点3：評価対象者 学習者に対する直接的な日本語の指導に携わる者、および行政や地域の関係機関等との連携の下、日本語教育プログラムの実践（直接的な指導を除く）に当たる者。（併せて「実践者」という。）

論点4：評価者 実践者が自らの指導力について自己評価することを基本とする。

論点5：評価の方法 指導力評価項目一覧から実践者が自らの役割として必要な項目を選択して作成するチェックシートを用いて、3段

階（◎＝良くできている、○＝できている、△＝できていない）で評価を行う。

論点6：評価で使用する資料 指導力評価に関するポートフォリオを中心に位置付ける。

4. 日本語指導力ポートフォリオ

「生活者としての外国人」に対する日本語教育実践者が自己評価に利用する日本語指導力ポートフォリオは、以下の構成要素を含んでいる。

- ①指導力評価項目一覧
- ②指導力評価に関するチェックシート
- ③日本語プログラム実践の記録
- ④研修受講の記録

指導力評価項目一覧は、指導力を評価するために必要な項目を一覧にしたもので、それぞれの項目が、地域日本語教育指導者、地域日本語教育コーディネーターのどちらを対象としているかも参考として氏増している。様式は図2のようになっている。

チェックシートは、実践者が指導力評価項目から自らの役割として必要な項目を選択して作成する。実践の記録は、日本語教育プログラムの実践に当たっての課題、目標、経過、成果および新たな課題等を記録するものであり、実践の過程を振り返るために作成する。

研修の記録は指導力の向上のために受講した研修について記録するものであり、実践者が自らの指導力の向上の変遷や理由を振り返るために作成する。

ポートフォリオは、実践者が地域の状況に応じて、工夫を加えて使いやすいものにしたうえで活用されることが期待されている。図3はその全体像を図示したものである。

このポートフォリオは、地域の日本語教育実践のみならず、日本語教育に関わる全ての人々にとって参考になる提案である。日本語教育実践に係る者それぞれが自分の実践を振り返り、目標設定を具体的な項目のレベルで行い、定期的に点検しつつ改

指導力評価について

Plan-Do-Check-Actionの別	対象例		評価の記録			
	指導者	コーディネーター	選択項目	①月日	②月日	③月日
指導力評価項目						
Plan (企画)						
I 地域や外国人の状況の把握						
1. 地域の外国人の状況の把握						
(a) 地域の外国人の状況や学習者の状況を把握している						
1) 地域の外国人の増減とその理由を把握している		<input type="radio"/>				
2) 学習者がこれまでに日本語学習をどの程度行っているか把握している	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>				
3) 学習者がこれまでに言語学習をどの程度行っているか把握している	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>				
4) 学習者の年齢、職業、家族形態などを把握している	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>				
5) 学習者の学習環境（辞書やオーディオ機器）などを所有しているか、日本語学習に協力してくれる人はいるか、どの程度日本語学習に時間を割けるかなどを把握している	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>				
6) 学習者の使用言語とその使用場面、日本語でのやり取りが求められる場面を把握している	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>				
(b) 学習者のニーズを把握している						
7) 学習者が生活面で課題として抱えていることを「身できないと困ること」「身できるようになりたいこと」「身後できるようになりたいこと」「いつかできるようになりたいこと」に分類するなど把握している	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>				
8) 学習者が求める教室活動の方法や教材などを適切な方法で把握している	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>				
2. 地域のリソース等の把握						

指導力評価項目一覧



役割として必要な項目を選択して、
チェックシートを作成する。

図2 指導力評価項目一覧の様式

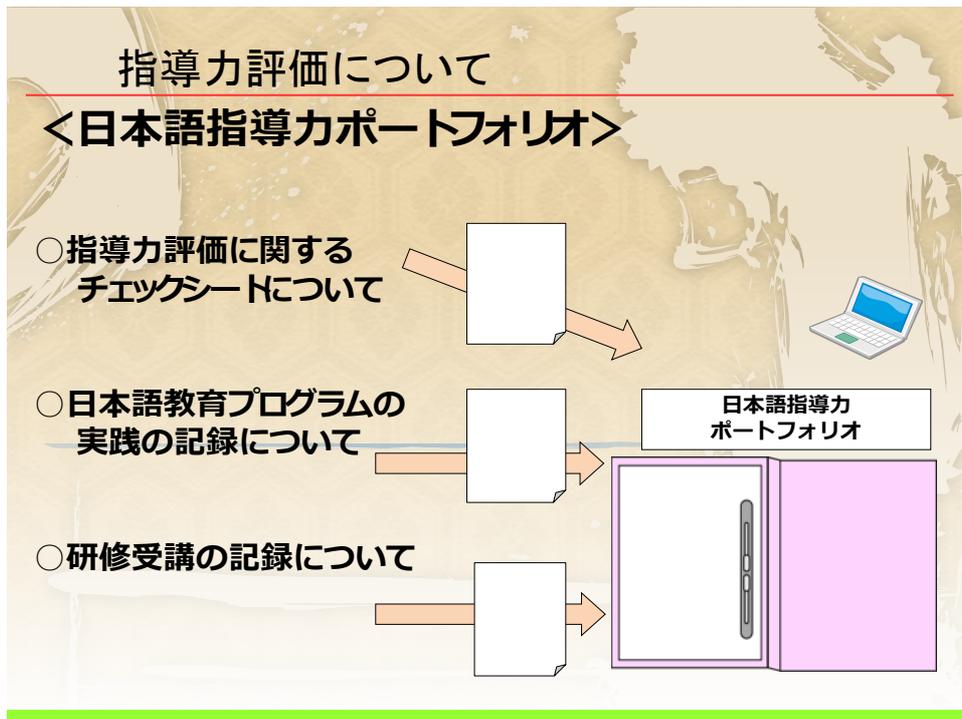


図3 日本語指導力ポートフォリオのイメージ

善を目指すサイクルの実施が、多くの実践者にとって、常に成長を続け、学習者から信頼される教育実践者になるためのツールとして活用されることを希望する。

参考文献

- 梶田叡一 (2010) 『教育評価』(第2版補訂2版) 有斐閣双書
- 木原俊行 (2004) 「教師の指導力」の自己点検・評価—取り組みの三つのレベル—『教育情報サイト』ベネッセ教育研究開発センター
- 国際交流基金 (2010) 『J F 日本語教育スタンダード 2010』
- _____ (2010) 『J F 日本語教育スタンダード 2010 利用者ガイドブック』
- 田中耕治 (2012) 『教育評価』(第4刷) 岩波書店
- 文化審議会国語分科会 (2010) 「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案について」
- _____ (2011) 「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案活用のためのガイドブック」
- _____ (2012) 「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案 教材例集」
- _____ (2012) 「生活者としての外国人」に対する日本語教育における日本語能力評価について」
- _____ (2013) 「生活者としての外国人」に対する日本語教育における指導力評について」
- 吉島茂他 (訳編) (2004) 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版社